

D. H. ロレンス研究：  
「ジミーと思い詰めた女」と『嵐が丘』

山 内 理 恵

Elements of *Wuthering Heights* in  
“Jimmy and the Desperate Woman”

Rie Yamanouchi

**Abstract**

The main aim of this paper is to demonstrate the possibility of an intertextual relationship between D. H. Lawrence and Emily Brontë. The paper will point out the striking similarities between the short story “Jimmy and the Desperate Woman” by Lawrence, and the novel *Wuthering Heights* by Brontë. As for the possibility of Brontë’s influence on Lawrence’s works, some critics such as Raymond Williams and Carol Siegel have located the latter as a predecessor of the former; the similarities between Lawrence’s *The White Peacock* and *Wuthering Heights* have also been noticed by critics such as Siegel and G. H. Ford. However, not much attention has been paid to finding elements of *Wuthering Heights* in Lawrence’s short stories. Therefore, this paper will show how the influence of Brontë can be seen in his short story “Jimmy and the Desperate Woman”, as well as explaining how this influence helps us understand the story on a new level.

## 1. 序

本論の目的は、D. H. ロレンス (D. H. Lawrence) の短篇小説「ジミー  
と思い詰めた女」(“Jimmy and the Desperate Woman”) の中に見られる  
『嵐が丘』(*Wuthering Heights*) の要素を指摘し、エミリ・ブロンテ (E.  
Brontë) のロレンス作品への影響を示すと共に、その効果について考え  
ることである。

幼なじみジェシー・チェインバーズ (J. Chambers) によると、ロレン  
スは1906年頃に『嵐が丘』を読んでいる。彼がブロンテに強い影響を受  
けた可能性については、拙論「D. H. ロレンス研究：ジェシー・チェイン  
バーズとブロンテ像」や「『白孔雀』と『嵐が丘』の繋がり——残虐性を  
通して——」などで説明を試みてきた<sup>1)</sup>。レイモンド・ウィリアムズ (R.  
Williams) やジョン・ワーゼン (J. Worthen), そしてキャロル・シーゲ  
ル (C. Siegel) などが、ロレンスをブロンテの後継者と位置付けている。  
両者には本能的なものや野性的なもの、情熱的なものに対する畏怖の念  
と憧れがあり、それらが作中に表れている。例えばブロンテの『嵐が丘』  
では、文明を象徴するエドガー・リントン (Edgar Linton) よりも野性を  
象徴するヒースクリフ (Heathcliff) に作者の共感が見られるし、同じこ  
とが『チャタレイ卿夫人の恋人』(*Lady Chatterley's Lover*) のクリフォ  
ード (Clifford) とメラーズ (Melors) との関係にも言える。文明を象徴す  
る人物は肉体的な強さに欠け、召使の力を借りてしか生きていけない。  
リントンは弱々しい華奢な肉体を持ち、侵入したヒースクリフを追いだ  
すのにも召使の力を借りる。クリフォードに至っては下半身不随という  
かたちで肉体的不能が象徴的に表現されている。また、彼らは体面や形  
式などの文明のルールに縛られ、周囲の目を気にせずに本能的に生きる  
ことができない。一方、野性を象徴するヒースクリフとメラーズは頑強  
な肉体を持ち、周囲から荒い扱いを受けながらも自力で逞しく生きる。  
キャシーの死後もヒースクリフは頑丈な身体で作品が終わる直前まで生

き続ける。メラーズの身体的強さはクリフォードを車椅子ごと持ち上げる場面に表現されている。彼らは恋愛には情熱的、本能的で、社会のルールや周囲の目、体面などはほとんど気にせず、人間の中にある野性を思わせる登場人物である。そして、それぞれの作品の中で野性を象徴するこれらの人物こそがヒーローとして描かれている。このように、人間の生に対する二人の作家の考え方には共通点がある。また、『嵐が丘』に見られるストーリーの構成やテーマがロレンスの初期作品『白孔雀』（*The White Peacock*）と酷似していることは、シーゲルやジョージ・H・フォード（G. H. Ford）などが指摘している。拙論「『白孔雀』と『嵐が丘』の繋がり——残虐性を通して——」では、この類似を出発点として、二作品に共通する残虐さに焦点を当てて論じた。『嵐が丘』でエドガーとヒースクリフがキャシー（Catherine Earnshaw）を取り合う三角関係は、『白孔雀』でレズリー（Leslie Tempest）とジョージ（George Saxton）がレットイ（Lettie Beardsall）を取り合う関係と重なる。このように、ロレンスの初期作品には、ブロンテの影響が見られる。そのため、その後のロレンスの作品にブロンテの影響が残っていたとしても不思議ではない。

本論では、ロレンスの短篇「ジミーと思い詰めた女」に見られるブロンテの世界との接点を指摘したい。なぜなら、『嵐が丘』への直接的な言及は見られないが、この作品には『嵐が丘』を思わせる登場人物や筋書きが散りばめられているからだ。

## 2. ジミーとジョン・ミドルトン・マリ

「ジミーと思い詰めた女」は1924年2月から4月にかけて執筆され、その年の10月に雑誌『クライテリオン』（*The Criterion*）第3号に掲載された。このストーリーの主人公ジミーは、当時のロレンスの友人の一人であるジョン・ミドルトン・マリ（John Middleton Murry）をモデルにしていると言われる。マリは文芸誌『アセニウム』（*The Athenaeum*）の編

集者を担当（1919-21）し、その後1923年に『アデルフィ』（*Adelphi*）を創刊した有能な批評家である。『ドストイェフスキー』（*Fyodor Dostoevsky: A Critical Study*: 1916）、『キーツとシェイクスピア』（*Keats and Shakespeare: A Study of Keats' Poetic Life from 1816 to 1820*: 1925）、『ジョナサン・スウィフト』（*Jonathan Swift: A Critical Biography*: 1954）など、多くの著作を出版している。また、T. S. エリオット（T. S. Eliot）やヴァージニア・ウルフ（V. Woolf）などの当時のモダニスト作家たちを応援したことで知られる。さらに、ニュージーランド出身の短篇小説家キャサリン・マンスフィールド（K. Mansfield）の同棲・結婚相手でもあった。ロレンスとの出会いは、マリがモダニズム芸術の期間誌『リズム』（*Rhythm*）を発行していた時期にロレンスが短篇を投稿したのがきっかけである。1913年夏に二人は知り合う。彼らはそれぞれのパートナーも含めて交流を深めるが、互いに激しい愛憎の両面を持ち合わせた関係だったらしい。戸田仁は彼らの友情を「牽引と反発の激しい起伏のある友情関係」（307）と呼んでいる。そして、鉄村春夫によると、1923年秋から冬にかけてフリーダ・ロレンス（Frieda Lawrence）がロレンスをメキシコに置いて単身でヨーロッパに帰っている期間に、マリとフリーダの関係が親密になったと推測される（マンスフィールドは1923年1月9日に死去している）。その年の12月12日にロレンスは帰国して二人に合流したが、二人の関係には気付いており、マリへの不信感を深めたいらしい。そう考えると、「ジミーと思い詰めた女」は、ロレンスがマリの裏切りを疑った直後に執筆されたことになる。

鉄村はこの作品を「最後の笑い」（“The Last Laugh”）、「国境線」（“The Border Line”）、「ほほ笑み」（“Smile”）と共に「マリ風刺物語群」と呼ぶが、確かにジミーの描写にはマリを思わせる部分が多く見られる。例えば、マリが文芸誌の有能な編集者であったのと同じように、ジミーは上流階級の知識人を対象とした雑誌『コメンテーター』（*Commentator*）の編集者である（“He was editor of a high-class, rather high-brow, rather successful magazine....”）。そして、ジミーと同じように、マリも雑誌への

投稿者である女性と恋愛関係を求めて会いに行くことがあった。キャサリン・マンスフィールドも1911年秋に『リズム』に投稿したことがきっかけでマリに出会う。彼はその作品に才能を感じて別の作品を送るよう彼女に求め、その後直接マンスフィールドに会っている。これは、ピネガー夫人が『コメンテーター』宛に送った詩にジミーが関心を持ち、他の作品を送るようにと彼女に手紙を書きつつ、直接会う約束を取り付ける筋書きと同じである。また、ブライアン・フィニー (B. Finney) の注によると、1923年にロレンスがフリーダを追って帰国した時期に、マリは『アデルフィ』に詩を送って来た炭鉱夫の妻に会いにノッティンガム州のマンスフィールドまで行ったらしい。結局その関係は上手く行かず、フィニーによれば、ロレンスはその事件を聞きヒントを得てこの作品を書いたという (534)。ジョン・ワーゼンもこの事件について言及している。彼によれば、フリーダを追って帰国していた時期にロレンスがマリのある女性との情のもつれから救い出し、そのことを「ジミーと思い詰めた女」に書いた (“...and during this week Lawrence helped rescue Murry from yet another emotional entanglement with a woman, the one he later commemorated in his story “Jimmy and the Desperate Woman” 304) とある。また、鉄村は1924年の春に24歳のヴィオレ・ル・メストル (Violet le Maistre) が『アデルフィ』に短篇小説を投稿してきたところ、マリが彼女に夢中になり、4月24日に二人は挙式したと指摘する。そして、マリを「女性の投稿者との恋愛を得意としていた」(391) と述べる。以上の情報を整理すると、マリは複数回にわたって女性投稿者に連絡を取り、会いに行っている。作品中で、投稿者であるピネガー夫人に連絡を取り、わざわざ会いに行く雑誌編集者ジミーの行動は、マリの行動パターンと同じなのである。

その他にも、ジミーとマリには共通点がある。例えば外見である。マリの写真を見ると、額が広く黒髪でメガネをかけていたことが分かる。そして、作中でジミーも黒髪でメガネをかけている。また、ジミーとマリは共にオックスフォード大学出身である。マリの「D. H. ロレンスの想

い出」(*Reminiscences of D. H. Lawrence*)によると、ロレンスはマリ宛の手紙の中で「オックスフォードが君をダメにしたと思う」(19)と書いている。古典的なエリート教育による人間育成へのロレンスの批判は、ジミーの描写にも表現される。例えば、以下のシーンがそうである。ピネガー夫人をロンドンに連れ去るために、ジミーはピネガー氏と話し合うことになる。そこで、ピネガー氏の帰宅前に宿の手配をすることにする。夫人は、ジミーを受け入れる宿があるかを心配し、自分も一緒に行って頼むと言う。しかし、ジミーは彼女をスキャンダルから守るためにその申し出を断る。語り手はそのようなジミーの対応に戸惑う夫人を“it was his manner, rather Oxfordy manner, more than anything else, that went beyond her. She wasn't used to it.”と描写する。オックスフォード式の礼儀が炭坑夫の妻に通じるわけではなく、ピネガー夫人に紳士気取りで接して悦に入るジミーの自己満足的な勘違いが皮肉られている。さらに、ピネガー氏が炭坑から帰宅した時にピネガー夫人から紹介され、立ちあがるジミーの様子は“Jimmy got up, with a bit of an Oxford wiggle...”とある。この様子は、炭坑夫の威厳のある登場(“Came the heavy-shod treat up the house entry, and the man entered, rather like a blast of wind.”)と対照をなす。作品の冒頭からジミーは“a poor little man nestled upon some woman's bosom”(348)や“his childlike, almost coy eyes”(365)などと描写されて、赤ん坊や子供のイメージと重ねられている。そのため、このようなジミーの未熟さと炭坑夫の成熟した堂々たる振舞いは対照的である。これは、作品の結末の伏線になっている。結末では、夫に愛想を尽かせたピネガー夫人が娘を連れてロンドンのジミーのもとに逃れてくるが、ジミーは彼女を見て炭坑夫の存在を感じる。ジミーが“She was hopelessly married to him.”(369)と感じるように、彼女を物理的に夫から引き離したとしても、夫の影響があまりにも大き過ぎて、彼女から夫の存在を消し去ることはできないのである。ジミーには炭坑夫のように女性を芯から影響・支配する力を持ってない。そのことは、作品の冒頭で彼が金持ちの若いアメリカ人に妻を取られて被害者意

識を高めて嘆き、自分に完全に服従してくれる女性を探し求めるという、コンプレックスを露わにした発想にも示されている。自分が女性を支配できないことへの強い不安から、彼は確実に支配できる女性を求めるのである。そして、このようなジミーの幼さへの皮肉は、そのままマリへの皮肉と取れる。戸田仁は『D. H. ロレンスの想い出』の「付録（1）」で、マリの情緒不安定と自信のなさについて以下のように述べている。

仕事の選択や結婚の問題に直面しても、彼は痛ましいほどに決断力に欠けており、そんな決定すらできなかったのである。結局、自活する必要に迫られて、彼はロンドンでジャーナリズムの仕事に着く決心をしたが、その後も彼は、仕事にしる私事にしる重大な決定を行う際に、他人に依存するという奇妙な癖から長らく抜け出せなかった。(264)

このようなマリの決断力の弱さや自信のなさ、ジミーの男性としての頼りなさとして描写されたものと思われる。もちろんフィクションであるため、ジミーの情けなさは誇張される傾向にある。マンスフィールドが亡くなるまで彼女と添い遂げたマリに対して、ジミーは妻に逃げられ、離婚する羽目に陥る。彼女の再婚の相手が金持ちの若いアメリカ人であることは、前妻の軽薄さが窺われる。また、そんな妻を選んだジミーへの疑問も浮かび上がる。一方で、ロレンスはマリの妻であるマンスフィールドに好意を持って接していたようであり、ジミーの妻が必ずしもマンスフィールドとは重ならない。

オックスフォード出身であることへの皮肉は他にも見られる。語り手はジミーの声を“in a voice more expostulatingly Oxford than ever”や“a resonant Oxford voice”と描写する。『リーダーズ英和辞典』第二版は、“Oxford accent”を「オックスフォードなまり、気取った語調」と説明する。そのため、これらの「オックスフォード風の声色」は、炭鉱町という不釣り合いな場所でのジミーの気取った話し方を皮肉ったものと思わ

れる。また、“*expostulatingly*”は「諫めるように」という意味であり、ジミーが自分の判断力に優越感を抱き、相手を下に見ている様子が伝わっている。

以上で見たように、ジミーは確かにマリをモデルにしていると言える。違う点もあるが、マリを個人的に知っている読者にはそれと分かる程度のヒントが皮肉に書き込まれている。

### 3. ジミーとロックウッド：教養と現実把握能力の低さ

ジミーの描写はマリを思わせると同時に、『嵐が丘』に出てくる上流階級の青年ロックウッドを連想させる。そこで、以下ではジミーとロックウッドの重なりを指摘することで、ロレンスがこの作品を創作した時に『嵐が丘』のイメージが念頭にあった可能性を示す。

#### (1) 教 養

まず、ジミーとロックウッドは教養がある。ジミーはオックスフォード出身の雑誌編集者である。これはジミーが「知識人」であることを象徴する。また、彼の意識の描写には文学的知識が散りばめられている。前妻に捨てられた彼が新たに求める女性像はトマス・ハーディ (Thomas Hardy) の『ダーヴァビル家のテス』(*Tess of the d'Urbervilles*) の主人公テス (Tess) や、ゲーテ (Goethe) の『ファウスト』(*Faust*) 第一部の主人公グレートヒェン (Gretchen)、もしくは旧約聖書に出てくるルツ (Ruth) のように単純で無教養な女性だと言う。また、彼がピネガー夫人の家を探して炭坑町をさまよい歩く様子を彼は「ヘカテの国をさまよう現代のユリシーズのように感じた」 (“He felt like some modern Ulysses wandering in the realms of Hecate.” 352) と表現する。そして、炭坑や工場の間をさまよう「現代のオデュッセイア」 (“a modern Odyssey among mines and factories” 352) のほうが、セイレーン (Sirens) やスキュラ (Scyllas)、カリュプデイス (Charybdises) のような恐ろしい女



怪たちの間をさまよったギリシャ神話の英雄よりもずっと恐ろしい体験をしているのだと述べ、自分の勇敢さを豪語する。天上・冥界と下界を司るヘカテ、美しい歌声で近くを通る船人を誘い寄せて難破させる半女半鳥の海の精セイレーン、近づく船を飲み込む6頭12足の海の女怪スキュラ、海の渦巻きを擬人化した女怪カリュプデイスは、いずれもギリシャ神話に出てくる女怪である。労働者であふれる炭坑町を女怪の溢れる世界と重ねる点に、彼の現実逃避的な空想癖と、労働者や女性のように自分とは異なるジャンルの人間に対する違和感と恐怖心が表れている。いずれにせよ、これらのギリシャ神話の引用は、彼の学識を読者に印象付ける。さらに、彼はシェフィールドで“Men in Books and Men in Life”というタイトルの講演をする。このような講演が出来るのも、彼が知識人であることを示す。

一方、ロックウッドの語りには、聖書の他にシェイクスピア (W. Shakespeare) による『リア王』(*King Lear*) への言及や『十二夜』(*Twelfth Night*) からの引用などもあり、読書で身に付けた教養を感じさせる。また、嵐が丘の寝室に通された時に箱型寝台の中で見つけた本を開いて中身を確認する様子や、風邪をひいて寝込んだ時に “I am too weak to read” (91) と読者に説明する様子、そして嵐が丘に監禁されたキャサリンが本を持っていないことを告げると驚き “No Books!... How do you contrive to live here without them?... take my books away, and I should be desperate!” (301) と反応する様子などは、読書への傾倒をうかがわせる。彼の言葉遣いはしばしば回りくどく、手の込んだ表現や使用頻度の少ない単語を使うことなどからも、教養があり、またそれをひけらかす気取った性格であることが分かる。例えば、初対面のヒースクリフへの自己紹介の言葉は “I do myself the honour of calling as soon as possible, after my arrival, to express the hope that I have not inconvenienced you by my perseverance in soliciting the occupation of Thrushcross Grange....” (3) とある。“I do myself the honour of calling” や “I have not inconvenienced you” などの表現の回りくどさや、“perse-

verance”, “soliciting”, “occupation”などの固い単語がそれに当たる。

このように、両作品の中で、語りはジミーとロックウッドがそれぞれ教養のある人物であることを読者に伝えている。

## (2) 現実と文学の世界の混乱

ジミーとロックウッドには、文学の世界と現実を混乱させる癖があるように思える。前妻に捨てられたジミーは、文学の中に出てくる「自己犠牲的な女性」こそが自分にふさわしいと考え、男性と社会に翻弄されて罪を犯し処刑されるテス、ファウストに誘惑されて身を落とし破滅するグレートヒェン、義母ナオミ (Naomi) に献身的に尽くすルツのような、いわば扱いやすく服従する女性、彼のためには身の破滅をも辞さない「都合のよい」女性を求める。語り手はその様子を “He imagined to himself some really *womanly* woman, to whom he should be *only* ‘fine and strong’, and not for one moment ‘the poor little man’” (348) と描写する。自分のことをありがたがり、ひたすら強く素晴らしい (*only* ‘fine and strong’) と感じてくれる女性の存在を単純に信じようとするこ自体、子供っぽい妄想と言える。これは、先ほど述べたように前妻をコントロールできなかった彼のコンプレックスの裏返しであろう。しかし同時に、自分を男性として引き立ててくれるような文学作品中の無教養で自己犠牲的な女性を現実世界に探し求めようとする様子は、彼の中で空想の世界と現実世界との区別が付いていない状態をうかがわせる。

また、ロックウッドの語りも文学と現実の混乱を露呈する。そもそも英国北部の屋敷を彼が借りようと思いついたのも、当時流行っていたゴシック小説の世界を求めてのことである。ロックウッドの語りがゴシック小説の世界をパロディ化していることについては、詳しくは拙論「*Wuthering Heights* におけるロックウッドの語りとゴシック小説」<sup>(2)</sup>を参照していただきたいが、嵐が丘についてのロックウッドの描写には、故意に嵐が丘をゴシック調に脚色する傾向が見られる。例えば、ロックウッドは初対面のヒースクリフを以下のように描写する。

...how my heart warmed towards him when I beheld his black eyes withdraw so **suspiciously** under their brows...and when his fingers sheltered themselves, with a **jealous** resolution, still further in his waistcoat, as I announced my name. (3 強調は山内)

“suspiciously”や“jealous”など、明らかに否定的な表現を使ってヒースクリフを描写しながら、そんな彼に「親しみを感じる」(“my heart warmed towards him” 3)と述べ、彼を「最高のやつ」(“A capital fellow!” 3)と呼ぶ。普通は敬遠されるようなヒースクリフの人物像が彼にとって魅力的と映るのは、ロックウッドが元々ゴシック的な世界を求めてこの地に来たためであり、ヒースクリフがゴシック小説の登場人物にピッタリであるためである。そして、ネリーが彼に嵐が丘の古い歴史や奇怪なヒースクリフの謎めいた背景、住民たちの複雑な家族関係を仄めかすと、このゴシック小説さながらの状況にこの上なく興奮してしまう(“I was excited, almost to a pitch of foolishness, through my nerves and brain.” 35)。また、彼が読者に語る嵐が丘周辺や内部の描写はゴシック調に脚色されている。例えば、嵐が丘の外に生えている茨の木の描写(“a range of gaunt thorns all stretching their limbs one way, as if craving alms of the sun.” 4)は、木の描写であるにもかかわらず人間に使われる「やせこけた」(gaunt)や「腕を伸ばす」(stretching their limbs)、「切望する」(craving)などを使い、まるで飢えて死にかけている人間であるかのような不吉な描写となっている。内部の描写も、天上からつるしてあるハムを“clusters of legs of beef, mutton and ham” (5)と、「脚の束」を思わせる不気味なイメージを与える言葉や語順が選ばれている。赤茶色の犬は“a huge, liver-coloured bitch pointer” (5)とあり、「肝臓色」という血なまぐさい表現が使われている。このように、ロックウッドはゴシック小説というフィクションの世界を現実世界に求め、その視点から読者にストーリーを語っている。また、彼はネリーに手紙を言付かって嵐が丘を訪ねた時にキャサリンと駆け落ちすることを妄想し、それをお

伽嘶以上にロマンチックだと考える。ジミーと同じく彼も、現実の世界に空想の世界を持ち込み、その中で生きていると言える。

### (3) 現実把握能力の低さ

このような文学世界と現実との混乱は、彼らの現実把握能力を低下させている。ロレンスはジミーの自己評価が周囲の評価とずれていることを、皮肉に指摘する。周囲の男友達のジミーへの評価は、“A good-looking, smooth-skinned satyr. That was Jimmy at his best. In the opinion of his men friends.” (349 強調は山内) とある。つまり、ギリシャ神話のサテュロスのようなものであるという。サテュロスは、酒神バッカス (Bacchus) に従う森の神で、半人半馬であるが、ヤギと重ねられるときもある。ローマ神話の「ファウヌス」(faun) と同一視され、酒好きで女好きである。周囲の男性たちが彼を「女好き」で「酒好き」、つまり遊び人であると見ていることが分かる。また、女性の友達は彼を “he was a fascinating little man with a profound understanding of life and the capacity really to understand a woman and to make a woman feel a queen....” (349) と見ているという。女性を理解し、喜ばせる能力があるという彼女たちの意見は、女性の扱いが上手いという点において「女好き」や「遊び人」という男友達の意見と重なる。また、彼を “a fascinating little man” と呼び、存在の小ささ、軽さを表現する。しかし、ジミー自身は自分のことを「殉教者聖セバスチアヌス」(Martyred Saint Sebastian) のようだと考える。聖セバスチアヌスとは、紀元前288年にキリスト者であることが知れて矢で射殺された殉教者で、美青年として聖画の題材にもなった。彼の頭の中では、離婚を求める妻の言葉のような「邪悪な世間から放たれる矢」が次々と自分に刺さり、犠牲の血が流れるのである。離婚を求められたことを理由に殉教者気取りである。ここに、彼の都合の悪い被害妄想と、現実把握能力の低さを見ることができる。

『嵐が丘』におけるロックウッドの語りがそのまま信用できないことは周知の事実である。まず、先ほど述べたように彼はゴシック小説の色眼

鏡を通して語るため、信憑性に疑問がある。さらに、彼はことごとく嵐が丘の住人たちの言動を読み違える。ストーリーの冒頭から、ヒースクリフの人格を「自分と同類」と勘違いする。“Mr Heathcliff and I are such a suitable pair to divide the desolation between us.” (3) と考え、ヒースクリフも自分と同じように人間嫌いを装いながらも実は感情を露呈するのが嫌いなタイプだと考える (“I know, by instinct, his reserve springs from an aversion to showy displays of feeling—to manifestation of mutual kindness. He'll love and hate, equally under cover....” 5-6) 「直感的に分かる」という表現が、いかにその直感があてにならないかを示している。翌日、彼は激情に駆られたヒースクリフが泣きながら窓からキャサリンの名前を呼ぶのを目撃する。読者はこの描写によって冒頭からヒースクリフの並々ならぬ情熱とロックウッドの語りの疑わしさに気づく。嵐が丘の床に積んであったウサギの死体すらキャサリンのペットだと勘違いするロックウッドは、このように状況把握能力が低いため、多くの勘違いによって読者の失笑を買う。

#### (4) 女性関係のまずさ

二人の現実把握能力の低さは、特に女性関係に於いて著しい。上で見たように、ジミーは従順で自己犠牲を厭わない女性こそが自分に相応しいと考えるが、彼が相手として選んだピネガー夫人は全く反対でのタイプで、詩を書くくらい洗練されており、独立心も旺盛で夫にも楯突く。そして、自分をこれ以上犠牲にしたくないと決めて、娘と一緒に家出する。つまり、彼女は従順でも自己犠牲的でもないのである。また、彼が求めた文学作品の中の女性たちのように情熱的であるどころか、いつも無表情である。しかし、このような夫人をジミーはロンドンで自分と一緒に住むように説得する。これは、彼がいかに自分の状況や願望をはっきりと把握できていないかを示す。

ロックウッドが女性関係において状況把握や対応のまずさを晒すのは、海辺のエピソードとキャサリンとの関係においてである。海辺で「女神

のごとく」美しい女性が彼に流し眼を返すようになった時、彼はそれに応えることなくよそよそしく尻込みして女性に恥をかかせる。もしその女性と仲良くなりたいと願っていたとすれば、彼にはそのような状況への対応能力に欠けていたと言える。また、別の見方をすれば、彼の他虐性や女性恐怖が表れているとも言える。キャサリンとの関係においては、社交辞令の通じない彼女にあくまで社交辞令で対応しようとする点に、ピネガー夫人に対してオックスフォード式に対応するジミーと同様の状況把握のまずさと融通の利かなさが感じられる。

#### (5) 女性への恐怖心

ジミーは、女性に対して自惚れつつも恐怖心を抱いている。例えば、ギリシャ神話の怪女たちがあふれる危険な世界を空想する点に、女性への恐怖心が見られる。彼にとって女性を理解できない危険な怪物なのである。彼は、完全にコントロールでき、絶対に自分を傷つけない安全な女性を欲している。彼女たちに自分を王様のように感じさせて欲しい（*"It was the turn of the women to make him feel a king."* 350）とか、彼が知的にも外見も財産上も優位に立てるような女性に崇め奉られたい（*"Some...women, to whom he would be a sort of Solomon of wisdom, beauty, and wealth. She would need to be in reduced circumstances to appreciate his wealth...."* 350）とかいう願望は、普通の女性を扱える自信のなさと共に、自分は王のように崇められ大切にされるべき存在だという傲慢な考えを表している。前妻のように意見を言い行動する女性はジミーを傷つける可能性があり、危険なのである。ピネガー夫人と話す時も、彼は愛想の悪いこの女性に怯えている（*"Jimmy felt definitely frightened."* 354）。彼女との会話は繰り返し「ギャンブル」に、彼は「ギャンブラー」にたとえられる。そして、*"The very sense of a gamble, in which he could not lose desperately, excited him."* (355) と、彼女への口説きは一種のギャンブル、つまり遊びとして行われていることが示される。そして、語りはジミーを繰り返し *"like a drunken man"* と呼び、

彼が正気でない様子を伝える。彼女と話しながらも彼女を見ずに自分に話しかけている（“...like a man talking absolutely to himself, and turning his eyes inwards.” 355, “He spoke still with his eyes turned inwards, talking to himself.” 356）様子から分かるように、彼の心は閉じているのである。ピネガー夫人への口説きを「ギャンブル」と捉え、まるで酔っ払いが独り言を言っているかのように心を閉ざした状態で彼女を口説くのは、ジミーが彼女に恐怖心を抱き、傷つくことを恐れて殻に閉じこもった状態であるからであろう。他人に心を開けずに口先だけで会話をするジミーは、社交のルールばかり重んじ本当の感情を示すことを恐れるロックウッドと、その表面的なコミュニケーションの取り方が共通している。

ロックウッドはキャサリンに惹かれながらも同時に彼女を恐れ、行動に出ることが出来ない。ネリーからキャサリンの母親についての話を聞き、“let me beware of the fascination that lurks in Catherine Heathcliff’s brilliant eyes. I should be in a curious taking if I surrendered my heart to that young person, and the daughter turned out a second edition of the mother!” (153) と用心する。その一方で、3度目に嵐が丘を訪れた日の帰りに彼女を一目見たいと思い裏口から出る。また、結末でキャサリンとヘアトンの婚約を知った時の彼の悔しがりようは、明らかに彼女への未練を表している。ヘアトンとキャサリンが仲良く勉強している様子を見て、“a mingled sense of curiosity, and envy that grew as I lingered” (307) と羨ましい気持ちを募らせ、さらに、“I bit my lips, in spite, at having thrown away the chance I might have had, of doing something besides staring at its smiting beauty.” (308) と、キャサリンに言い寄らなかったことを悔やむ。このように、彼は行動すべき時にその状況を理解せず、後になって後悔するのである。また、キャサリンが自分の魅力に気付かないことの原因を “Living among clowns and misanthropists, she probably cannot appreciate a better class of people, when she meets them.” (304) と考える。自分が「高尚な人」(a better class of people)

であり、「その価値を認められる」(appreciate)べきであるという傲慢な考えが読み取れる。さらに、キャサリンを連れて逃げることを妄想する時、“What a realization of something more romantic than a fairy tale it would have been **for Mrs. Linton Heathcliff**, had she and I struck up an attachment, as her good nurse desired, and migrated together, into the stirring atmosphere of the town!” (304 強調は山内)と、「彼女にとって」と述べるのは、自分と一緒になれば彼女の得である、自分は女性が手に入れると有利な男性である、などの傲慢な考えが見られる。彼女と一緒になれたら自分が幸せだということには一切触れていない。これらの語りに見られる傲慢さは、都合のよい勘違いを露呈している。なぜなら、キャサリンにとって、建前や社交辞令、表面的な人間関係などを重んじ情熱を恐れるロックウッドは、男性として魅力がないからである。

このように、ジミーとロックウッドは二人とも教養があるエリートで、本好きで、本の世界と現実世界を混乱する傾向がある。また、そのために現実をそのまま把握する能力に欠ける。この癖は自信のなさから来る現実逃避と思われる。都合のよいように世界を見たり状況を解釈したりするため、彼らの現実把握は歪んでいる。『嵐が丘』のロックウッドの語りの箇所では彼の目を通した一人称の語りで進められ、「ジミーと思い詰めた女」は三人称の語りではあるが視点はジミーの目を通したものである。そのため、両作品で読者は個人的に歪められて信用の置けない語りに直面する。ただし、ロレンスもブロンテも冒頭からこれらの登場人物たちを皮肉をこめて描くため、読む側もそのことにすぐに気付き、彼らを愚かで滑稽な人物として読むことになる。彼らの愚かさや滑稽さは、特に女性関係に於いて顕著である。それはつまり、エリート教育の影響で、彼らが恋愛のような動物的な感情の迸りをそのまま受け入れられなくなっているという考え方から来る。彼らは社交界で必要とされるような表面的な人間関係を築くことは得意としているが、心の底まで曝け出して誰かにぶつかって行く能力に乏しい。そして、それゆえに、恋愛の



情熱によって自己が壊されることを恐れ、恋愛の対象となる女性たちを恐れるのである。このように、エリート教育によって文明の影響を色濃く受ける階層が、動物的本能や情熱を去勢されて男性として魅力がなく、文明の影響が薄い男性のほうが動物的魅力をおおいに発揮するという、ロレンスとブロンテとの共通の価値観が表現されている。ジミーとロックウッドがこれほど似た人物像として描かれているのは、作者たちがこのような価値観を共有しているからであろう。

#### 4. ジミーとロックウッド：収入と出身地

人格的な共通点以外にも、ジミーとロックウッドには設定上の共通点がある。ここでは、彼らの収入と出身地について述べる。

##### (1) 収 入

まず、両者とも「裕福な登場人物」として登場する。もちろん有閑階級のロックウッドと文芸誌の編集者ジミーとは階級も収入も全く異なるだろうが、ここで問題としているのは、相手との関係においてである。つまり、上流階級のロックウッドが自作農の嵐が丘の住民たちに対して裕福であるのと同様に、ホワイトカラーのジミーはブルーカラーのピネガー夫妻よりも裕福である。この階級と収入の差は、当然ながら教育の差、教養の差にもつながる。ただし、ここで注意したいのは、ジミーやロックウッドの方が多くの教育を受けているとはいえ、ピネガー夫妻や嵐が丘の人々（ヒースクリフやキャサリン、ネリーなど）も決して全くの無教養ではないということである。ピネガー夫人は詩を書き、ピネガー氏も知的な雑誌を読む。嵐が丘ではヒースクリフは紳士の物腰だであるし、キャサリンやネリーは読書好きである。ジミーとロックウッドの語りに見られる教養の誇示は、むしろ彼らがピネガー夫妻や嵐が丘の住民たちに比べて教養を見せびらかす傾向にあることを示すと理解できる。

このように、「教養を誇示する裕福な階級＝軟弱、生命力の欠如」と「教養を誇示しない質素な階級＝強い生命力」の対照が、ブロンテとロレンスの作品の両方に当てはまる。そしてこれは、人間の生命の源である情熱を文明が殺しているというロレンスとブロンテに共通する考えを示している。エリート教育によって文明に色濃く染められた人間はすべてを頭で考えてしまうため、情熱から切り離され、もはや人間として自然な生き方が出来なくなる。そのため不安に陥り、自分たちに残された教養や財産、身分などにしがみつこうになるという理解だろう。

## (2) 出身地

ジミーもロックウッドもロンドンを中心とした英国南部の人間である。ピネガー夫人を訪ねて英国北部の炭鉱の町に行くジミーは、ほとんどオックスフォードから北へ行ったことがない（“He himself had scarcely set foot north of Oxford”）とされる。彼がロンドン在住であることは、ピネガー夫人に“Come to London and live with me, as my wife...” (355) と誘うことから分かる。『嵐が丘』のロックウッドも同様に英国南部の人間である。彼は午後5時に正餐を取りたいとネリーに頼むが、5時に正餐を取るスタイルは当時ロンドンを中心とする英国南部の上流階級で流行していた。また、ロックウッドは都会と田舎の住民を対比させて、後者の方がより人間を大切にするし、より懸命で自分に誠実に生きていると褒める。その対照として都会の人間の表面的な社交生活を引き合いに出すが、これは彼が自分を都会の人間と位置付けるから出てくるセリフである。そして、嵐が丘を引き払うと決めた時、彼は“I shall spend the next six months in London.” (298) と語る。彼が常にロンドンに住んでいるのかどうかは分からないが、少なくともロンドンを中心とした英国南部の社交界が彼の普段の居場所であると推測される。

このように、両作品は共通して「英国南部の男性が英国北部を訪れる物語」と言える。英国南部の人間は教養と経済力はあるが軟弱で軽薄に、北部の人間は教養や経済力は劣るが素朴で情熱的に描かれている。プロ

ンテがヨークシャー、ロレンスがノッティンガムと、両作家が英国中北部出身であることを考えると、この南部出身者への偏見とも取れる価値観を二人が共有するのも不思議でない。

## 5. ジミーとロックウッド：訪問の体験

次に、これら二作品の中でジミーとロックウッドが北部を訪問した時に直面した出来ごとの類似点を指摘する。まず、南部からやってきた彼らは北部の「見知らぬ人の家」を訪れる。ジミーはピネガー家、ロックウッドは嵐が丘である。そして、両者とも歓迎されず、初対面の女性に冷たくあしらわれる。しかも、二人はそれぞれその女性を恋愛の対象として見ている。そして、ジミーとロックウッドは、共に訪問先の家族の緊迫した人間関係に巻き込まれていく。

### (1) 感じの悪い女性たち

ジミーは、ようやく辿り着いたピネガー家でそっけないピネガー夫人に見下ろされる（“A rather tall woman, looking down at him with a **“Who are you?” look**, from the step above.” 353 強調は山内）。彼女がジミーを認識してからも、彼女の態度は冷たいままである。そして、彼は彼女に「怒り」、「復讐心」、そして「反抗心」を感じる。

Mrs. Pinnegar, a tall woman with a face like a mask of passive anger, looking at him coldly.” (353 強調は山内)

She sat there rather distant, very laconic, looking at him with those curious unyielding eyes. She looked to him like a woman who has had her revenge, and is left stranded on the reefs where she wrecked her opponent. Still unrelenting, unregretting, unyielding, she seemed rather undecided as to what her revenge had been,

and what it had all been about. (354 強調は山内)

このように、ジミーは彼女によそそしさだけではなく「敵意」を感じる。夫人の「敵意」や「反抗心」や「復讐心」は、ジミー個人に向けてというよりも、社会に投げかけられたものである。彼女の夫には愛人がおり、彼はしばしばそこで過ごす。しかし、ピネガー夫人は妻の務めとして家事全般と子育てをこなし、炭坑から帰宅する夫のために食事を作り、身体を洗ってやらなければならない。ジミーが訪れた時も、夫人が夫に夕食を作る光景に出くわす。この光景は、彼女が家事に束縛されている日常を象徴的に示す。愛がないのに法律上の夫婦関係に拘束されることへの彼女のストレスは、以下の夫婦間の会話から分かる。

“And what about me?” she asked, **coldly and fiercely**

“You? You’ve got a home. You’ve got a child. You’ve got a man who works for you. You’ve got what you want. You do as you like—”

“Do I?” she asked, **with intolerable sarcasm.**

“Yes. Apart from the bit of work in the house, you do as you like. If you want to go, you can go. But while you live in my house, you must respect it. You bring no men here, you see.”

“Do *you* respect your home?” she said.

“Yes! I do! If I get another woman—who pleases me—I deprive you of nothing. All I ask of you is to do your duty as a housewife.”

“Down to washing your back!” she said, **heavily sarcastic...**

(362-3 強調は山内)

上の引用では、夫の感情描写は特になく、夫人の苦々しい感情描写ばかりが繰り返し表現されている。彼女の「冷たく陰しい」様子や「強烈な辛辣さ」は、家庭に縛られて身動きが取れない彼女の怒りとフラストレー

ションをうかがわせる。さらに、彼女は教職免許状を持っており、以前、婚前は学校で教師をしていたことを手紙でジミーに説明している。そして、“If I could, I would teach again, and live alone. But married teachers can’t get jobs any more, they aren’t allowed—” (350) と述べ、既婚であることが原因でもはや教職に就けず、自活することができない事実を悔しがっている。結婚がもたらしたこのような不幸な袋小路のために、彼女は夫と社会に怒りを感じ、復讐心や反抗心を抱いているようである。

さて、今度は『嵐が丘』を見てみる。ロックウッドの嵐が丘訪問は、ジミーの訪問と同様に歓迎されない。二度目の嵐が丘訪問の時に、彼はヘアトンに招き入れられて嵐が丘の中に入り、初めてキャサリンに出会う。この「若奥様」に喜んで話しかけるが、彼女の反応も、ピネガー夫人同様に冷たく攻撃的で怒りに満ちている。話しかけるロックウッドを凝視しながらも、彼女は一切口を開かない。ようやく口を開いたと思えば、ロックウッドが“repellingly”や“scornfully”と修飾するほどにそっけなく感じが悪い。そして彼女の目に表れていた表情は「蔑み」(“scorn”)と「絶望」(“desperation”)であったという。これらの攻撃的で怒りに満ちた絶望感は、彼女がヒースクリフによって嵐が丘に監禁され、外に出ることを許されない立場にあったことから生じている。彼女はリントン家の一人娘で、ヒースクリフによって無理やり嵐が丘に監禁されて息子リントンと結婚させられ、夫の死後も引き続き義父によって嵐が丘に閉じ込められ続けた。召使を抱える嵐が丘では、キャサリンが直接家事をすることはないが、ヘアトンやヒースクリフに怒鳴られながら彼女が渋々お茶を入れる場面は、嫌々ながらも食事を用意して夫の背中を洗うピネガー夫人と同様に、愛のない家族に隷属させられる立場に彼女があることを象徴的に示す。翌日の朝に彼女はヒースクリフに“...you live on my charity!...find something to do. You shall pay me for the plague of having you eternally in my sight—do you hear, damnable jade!”と怒鳴られる。これも、ピネガー夫人が夫から「お前のために働いているのだから、この家にいる間は俺のルールに従え」と命令されるのと同じである。これ

ら二人の女性は肉体的にも精神的にも家父によって拘束され、自由を奪われているのである。

また、ピネガー夫人とキャサリンの共通の武器の一つとして描かれているのが「視線」である。ジミーが最初にピネガー夫人に会うとき、彼は彼女の冷たい視線（“looking at him coldly” 353）に気づく。彼女の目は “with a relentless, unyielding feminine will” (353) や “unflinching eyes with their gold flecks, seemed to be challenging him to something” (354) と描写され、攻撃的である。そして、ジミーは彼女の視線に威力を感じている。それは以下の引用から分かる。

The woman...started watching *him* with that slow, straight stare.

“It’s not”—he began, stuttering— “It’s not anything sudden and unconsidered on my part.” (355)

この語りはジミーの視点を通して語られるため、“him”の強調（イタリックス）は、彼女が自分を見つめ始めたことに対する彼の動揺を表現する。そして、彼がここで口ごもる（stuttering）のも、心の動揺の表れと解釈できる。ロックウッドが最初にキャサリンに出会った時の、彼女の無礼な無言の凝視と「蔑み」と「絶望」を浮かべた目の表情については上ですでに見た。また、キャサリンはロックウッド以外の住民たちも目で攻撃する。ジョーゼフに黒魔術を使ってひどい目に合わせてやろうかと脅す時の彼女の様子は “The little witch put a mock malignity into her beautiful eyes...” (15) と、やはり目に攻撃の色を浮かべている。また、ネリーの語りの中でも、彼女がヒースクリフを目で攻撃する様子が度々語られる。病気の父親をスラッシュクロス・グレンジに置いたまま嵐が丘に監禁された時、彼女はヒースクリフにカギを渡すよう詰め寄るが、その時も彼女の目の様子が “her black eyes flashing with passion and resolution” (270) とある。また、ヘアトンと仲良くなった後も、キャサリンはヒースクリフへの目の攻撃を止めない。ネリーの語りによると、“Catherine

met it (Mr. Heathcliff's eye) with her accustomed look of nervousness, and yet defiance, which he abhorred.” (318) とあり、またそんな彼女の目を見たヒースクリフは “What fiend possesses you to stare back at me, continually, with those infernal eyes?” (318) と述べる。

このように、ピネガー夫人もキャサリンも、愛情のない家父に無理やり服従を強いられるストレスと、それに対する反発が原因で攻撃的で冷淡になっている。そして、客人であるジミーやロックウッドにも冷淡で攻撃的な態度や表情を示す。既婚であるためにもはや教職に就くことも出来ず、夫に依存して生きていくほかに道がないピネガー夫人と、義父ヒースクリフに監禁されて嵐が丘で生活せざるを得ないキャサリンは、現実的にこれらの家父に逆らうにはあまりにも立場が弱過ぎる。そのため、彼女たちは反発を不機嫌さや攻撃的な目などで表現している。そして、全くの他人であるジミーやロックウッドが彼女たちに表面的な慰撫さを発揮すればするほど、彼らを見下ろしそつけない態度を取る彼女たちの社交ルール上の違反が強調され、彼女たちの反発と怒りが伝わって来る。服従しないことで社会に対抗しているのである。また同時に、彼女たちの情熱的な怒りは本質的な人間関係を築くことができないジミーとロックウッドの感情の薄さと対照的である。

## (2) 逃避の手段としての読書

ピネガー夫人とキャサリンは詩や本を好む女性である。作詩や読書は彼女たちが不幸な現実から目を背けるために貴重な役割を果たす。ピネガー夫人はジミーに “I try to write poetry, if it is poetry, because I have no other way of expressing myself at all, and even if it doesn't matter to anybody besides myself, I feel I must and will express myself, if only to save myself from developing cancer or some disease that women have.” (350) と告白する。詩作に対するこの態度は、出版する気もなく自分のために詩を作り続けたエミリー・ブロンテを思わせる。ブロンテは一生独身で、家父長制度の強い時代に父と伯母、そして姉妹や兄と共に住んで

いた。そして、家事をこなしながら読書をしたり創作をしたりしていたと言う。ギaskell (E. Gaskell) は『シャーロット・ブロンテの生涯』(*The Life of Charlotte Brontë*)の中で、エミリー・ブロンテが料理の主要部分を引き受け、アイロンがけをし、家政婦タビィ (Tabby: Tabitha Ackroyd) が老衰してからはパンも全て作っていたと述べる。そして、彼女が台所でパンをこねながらドイツ語の勉強をしたり、ケーキを焼きながら読書をしたりしていた様子を伝えている。(142) ギaskell はブロンテ姉妹が家父長制に適応するよう教育されていた様子を、「娘たちは、すべての家事を進んでするのが彼女らの身分の女性の純然たる義務だと、父からは論理的に、伯母からは実際面で教えられていた」(142) と説明する。近年、ギaskell によるブロンテ姉妹の伝記はシャーロットを庇うあまりに不正確であることが指摘されている。しかし、ロレンスはこの伝記を1909年1月に読み終えているため、彼はこの本からエミリー・ブロンテについての情報を得ていたと思われる。ロレンスがブロンテの人生を意識してピネガー夫人の詩作への考えを書いたかどうかは分からないが、少なくともブロンテが置かれていた女性としての社会的立場と、そこから生じるストレスのはけ口の必要性は、ピネガー夫人のものと同質である。

一方、『嵐が丘』の中でキャサリンは、自分が愛した本を“all old friends” (301) と呼び、それらをヘアトンが盗むと言って怒る。そして、それらの本をヘアトンがひどい発音で読むと非難して “Those books, both prose and verse, were consecrated to me by other associations, and I hate to have them debased and profaned in his mouth!” (302) と訴える。それぞれの本に他の思い出がまつわっているという彼女の訴えは、本を読むときに彼女が過去の思い出などに浸り、現実を忘れる手段として本を利用していることを推測させる。そう考えると、キャサリンにとって文学はやはり辛い現実からの逃避の道具だと言える。



### (3) 訪問にまつわる体験

次に、ジミーとロックウッドがそれぞれ訪問する時に出くわした出来ごとの共通点を指摘する。ジミーもロックウッドも夕方、寒くて足元の悪い中をにピネガー家や嵐が丘を訪れ、食事の準備の場面に遭遇し、夜に興奮した状態で去ろうとする（ジミーは去るが、ロックウッドは結局去らない）。さらに、翌日に食事に誘われて断る。このように、二作品ではジミーとロックウッドが体験する状況の流れが共通している。

まず、ジミーがピネガー家までやって来る様子と、ロックウッドが2度目に嵐が丘までやって来る様子を下に比べる。

...as he waded through icy black mud, in a black lane, under black trees that moaned an accompaniment to the sound of the coal-mine's occasional hissing and chuffing, under a black sky that quenched even the electric sparkle of the colliery." ("Jimmy and the Desperate Woman": 353 強調は山内)

Yesterday afternoon set in misty and cold. I had half a mind to spend it by my study fire, instead of wading through heath and mud to Wuthering Heights.

On coming up from dinner, however...on mounting the stairs with this lazy intention, and stepping into the room, I saw a servant-girl on her knees, surrounded by brushes and coal-scuttles, and raising an infernal dust as she extinguished the flames with heaps of cinders. This spectacle drove me back immediately; I took my hat, and, after a four miles walk, arrived at Heathcliff's garden gate just in time to escape the first feathery flakes of a snow shower.

On that bleak hill top the earth was hard with a black frost, and the air made me shiver through every limb. (*Wuthering Heights*: 8 強調は山内)

二つの引用には、共通する表現やイメージが使われている。まず、ロレンスが“black mud”, “black lane”, “black trees”, “black sky”と繰り返す“black”は、「黒いぬかるみ」が仄めかす天候の悪さと、夕闇が近づいているための暗さと、そして炭坑の町である象徴の色としての黒さが重ねられている。『嵐が丘』でもロックウッドが目にする丘のてっぺんの霜が“black frost”と表現され、天候の悪くなりつつある夕方にロックウッドが見かけた泥の混じった霜の様子が「暗い・黒っぽい」世界を印象付ける。また、ロックウッドの語りの“instead of wading through heath and mud”の「どろ」によっても、天候が悪くて足元がぬかるんでいたことがうかがえる。ジミーに“icy”と表現される気温の低さは、『嵐が丘』でも“cold”, “snow”, “frost”で表現されている。両作品の気温設定は「凍てつくほど」の寒さだと言える。また、両作品では、“black”の他にも“mud”や“wade through”などの同一の単語や表現が使われている。“wade through”は困難な中を骨折って進んで行った様子が表現されている。このように、実際には荒野のてっぺんにある家と炭坑町にある家という風に全く違った設定の場所を訪れているのだが、ジミーとロックウッドがそれぞれピネガー家と嵐が丘を訪ねていく様子の描写がかなり似ている。

ジミーとロックウッドが訪れた時、ピネガー家でも嵐が丘でも夕食の準備がされている。これがピネガー夫人やキャサリンの家父への隷属状態を印象付けるための描写であることは上に見た。キャサリンがロックウッドのためにお茶を入れることを一旦拒否する一方で、ピネガー夫人はジミーのために進んでお茶を入れ、パンとジャムやバターを出す。既婚で子持ちの30代くらいのピネガー夫人は、甘やかされて育った小娘で結婚生活もほとんど体験していないキャサリンよりも社会に順応していると言える。また、生きていくためには、渋々ながらも自分の人生や社会での役割を表面上受け入れざるを得ないという夫人の認識も窺える。キャサリンのような劇的な状況に追い込まれる女性は稀だが、ピネガー夫人の状況に追い込まれる女性は数多い。夫への怒りを抱く彼女の表面

的な服従は、当時の一般的な英国労働者階級の女性の人生を象徴的に表しているとも言える。

次に、ジミーとロックウッドが夜に立ち去ろうとするときの興奮状態について述べる。ロックウッドが2回目に訪問した日の夕方は吹雪になる。帰りに案内人をつけて欲しいとヒースクリフに頼むが断られ、赤の他人だからと居間のソファで寝ることすら断られたロックウッドは怒ってジョーゼフから提灯を奪って帰ろうとする。しかし、ジョーゼフがけしかけた犬に捕まり、倒される。この時のロックウッドの興奮状態は“hatless and trembling with wrath”や“The vehemence of my agitation”などと表現され、彼が興奮して取りみだし、ヒースクリフやヘアトンにリア王ばりの悪態をつく様子が描かれる。一方、ジミーがピネガー家を訪問した夜に最後に出ていく様子は以下のように描かれている。

There was a curious elation in his sprits, mingled with fear. But then he always needed an element of fear, really, to elate him. He thought with terror of those two human beings left in that house together. The frightening state of tension! (364-5)

恐怖で興奮したジミーの様子が描かれている。2人がここで遭遇する状況はかなり異なる。ロックウッドは提灯を奪って帰宅する計画に失敗し、ヒースクリフ達にあざ笑われて屈辱を味わう。一方、ジミーは本来の目的であるピネガー夫人を口説くことに成功する。しかし、2人の精神状態には「恐れ」と「興奮」という共通の要素がある。そして、それは訪れた家族の間にある強烈な緊張感を外部者として体験したことから来ている。その意味では、彼らがそれぞれの夜に訪問した家族から離れようとする・離れる時に体験する興奮した精神状態は類似していると考えられる。

訪問の翌朝、ジミーとロックウッドは訪問した家族から食事を勧められて断る。まず、ジミーは最初の訪問日の夜に一旦宿に戻り、翌朝に再

度訪問する。12時30分の電車に乗ることを告げ、ピネガー夫人から食事に誘われる。

“You’ll have dinner before you go,” she said.

“No!” he cried in panic, unwilling indeed to eat before that other man.

“No, I ate a fabulous breakfast. I will get a sandwich when I change in Sheffield: *really!*” (366)

ジミーは“the other man”，つまりピネガー氏の前で食事をしたくないために、この誘いを受けてパニックに陥る。ジミーの目を通した語り手の強調“indeed”や、ジミーの言葉の中の“really!”は、彼がいかに嫌がっているかをうかがわせる。一方、『嵐が丘』では、仕方なく嵐が丘で一泊したロックウッドが、翌朝に朝食を誘われ、断る（“I declined joining their breakfast...” 31）。食事を共にすることが相手と親しくなろうとする、もしくは相手に好意を示す社交的行為であるとすれば、食事を断るジミーとロックウッドはピネガー氏や嵐が丘の住民たちと交わりたくないと思いを閉ざしている様子を象徴的に表している。そして、そこには彼らの恐怖や、相手を異質として拒絶する心理的な壁が存在している。

以上で見たように、ジミーとロックウッドの人物像が似ているだけでなく、「ジミーと思い詰めた女」の状況設定やストーリーの流れにも、『嵐が丘』との多くの共通点や類似点がある。これほどの共通点を抱えている「ジミーと思い詰めた女」と『嵐が丘』が全く無関係であるのは考えにくい。意識的かどうかは分からないが、マリを皮肉るために「ジミーと思い詰めた女」を執筆する際、ロレンスの脳裏に『嵐が丘』のロックウッドのイメージがあったのではないかと思われる。

## 6. 『嵐が丘』の書き換えとしての「ジミーと思い詰めた女」

ここでは、ロレンスが「ジミーと思い詰めた女」を作成するときに『嵐が丘』の登場人物やプロットなどに影響を受けていたと仮定して、『嵐が丘』の書き換えとしての「ジミーと思い詰めた女」がもたらす意味について考える。

「ジミーと思い詰めた女」が『嵐が丘』の書き換えだとすると、ヨークシャーの荒野は炭坑町へ、若い寡婦キャサリンは子連れの既婚女性ピネガー夫人へ、義父のヒースクリフは夫の炭坑夫へ、上流階級の独身男性ロックウッドは離婚歴のある編集者のジミーへと書き換えられている。これらの違いは、荒野の傍で一生の大半を過ごし、ほとんど恋愛経験もないと言われる28、9歳の未婚女性ブロンテと、炭坑夫の息子として炭坑町に生まれ育ち、複数の女性と関係を持ったあとで人妻と駆け落ちして結婚した40歳前のロレンスとの違いの表れと言える。二人はそれぞれ自分の心のふるさととなった環境を舞台に設定した。登場人物の年齢層が「ジミーと思い詰めた女」の方が高いのは、それを執筆した時のロレンスの年齢が40歳近くであるためであろう。ピネガー夫妻は当時の彼より少し若い世代という設定になっている。また、ジミーの離婚歴やピネガー夫人が子連れの既婚者であることも、彼のほうがブロンテよりも男女関係について色々な体験を踏み、また色々な話を聞いてきたためと思われる。ピネガー夫人が既婚の子連れという設定は、ロレンスがフリーダと駆け落ちした時のフリーダの状況と同じである。彼女は当時、ノッティンガム・ユニヴァーシティ・カレッジ（Nottingham University College）のアーネスト・ウィークリー（Earnest Weekly）教授の妻で、夫妻には3人の子供がいた。ピネガー夫人を既婚の子連れに設定したのは、家庭への束縛の強さを印象付けるためと思われるが、ロレンス自身の体験も影響しているのかもしれない。上流階級のロックウッドと自作農家のヒースクリフのペアに比べ、雑誌編集者のジミーと炭坑夫のピネ

ガー氏のペアはかなり階級が下がる。しかし、それぞれのペアの対照がストーリーにもたらす効果は同じである。ロックウッドの教養を誇示する態度や流暢な言葉遣いがヒースクリフの粗野でぶっきらぼうな言葉や態度と対照をなすように、ジミーのオックスフォード訛りやオックスフォード流の立ち振舞いはピネガー氏の労働者らしい荒い言動と対照をなす。そして、ヒースクリフの存在がロックウッドの存在を上まると同じように、「ジミーと思い詰めた女」の結末では、逃げてきた女の中に炭坑夫である夫のオーラとも言える強烈な存在感を感じ、ジミーは圧倒される。マリをモデルにするため、ジミーが編集者であるのは自然だが、それと同時に、ロレンスはこのストーリーの題材にごく身近な世界を選んだと言える。彼の父親が炭坑夫であったことを考えると、ピネガー夫妻はロレンスの両親を映すとも解釈できる。このように、「ジミーと思い詰めた女」はロレンスが『嵐が丘』のストーリーを自分の年齢と生まれ育った土地や階級、よく馴染んだ職業など、彼のよく知っている現実の世界に引き寄せて書き換えたものと解釈できる。

ロックウッドとジミーの行動で決定的に対照的な点がある。それは、ロックウッドはキャサリンを連れ出すことを夢見るだけで終わる一方で、ジミーはピネガー夫人に実際に求婚し、彼女を連れ出すことに成功する点である。ジミーが突然彼女を訪ねて結婚を申し込み、彼女を現状から別の世界へ連れ出そうとするエピソードは、キャサリン・ヒースクリフを見たロックウッドが彼女との駆け落ちもしくは結婚を夢見た筋書きを、そのままジミーが実行に移したかのようだ。女性が本人の意思とは逆らう生き方をしてしまったに違いないと確信するジミーが彼女に言ったセリフは、そのままロックウッドがキャサリンに言うべきだったセリフである。

“You’re evidently not happy here. You’re evidently in the wrong circumstances altogether. You’re obviously NOT just an ordinary woman. Well, then, break away. When I say, Come and live with

me, I mean just what I say. Come to London and live with me, as my wife, if you like, and then if we want to marry, when you get a divorce, why, we can do it.” (355)

ただし、二人の行動は対照的であるとは言え、結末でジミーが本当の意味で彼女の心を手に入れることが出来なかったことを考えると、ジミーも結局はロックウッドと同様に真の伴侶を見つけることに失敗したと理解できる。現状から救われることを夢見る不幸な寡婦・妻に別の男性が救世主として現れ、救い出すというお伽噺的テーマは、このようにブロンテとロレンスの両方によって皮肉を込めて描かれる。ロレンスが実生活で知り合ったばかりのフリーダを駆け落ちに誘い、彼女を退屈な結婚生活から救い出したことを考えると、ジミーとロレンスを重ねることも可能だが、ジミーが情けない人物として明らかに否定的に描写されていることを考えると、ロレンスがジミーに自分を重ねたとは考えにくい。むしろ、自分が成功させた駆け落ちにジミーが失敗することで、自分とジミー（＝マリ）との優劣をはっきりと示すつもりだったのではないだろうか。

さて、ジミーが実在人物であるマリをモデルにしているとすれば、他の登場人物たちとの関係はどう理解すればよいのだろうか。まず、マリがフリーダに手を出したことをロレンスが苦々しく思って書いた作品だと考えると、炭坑夫はロレンス、ピネガー夫人はフリーダという配役になる。これは、ロレンスが炭坑夫の息子であることを思えば、十分あり得る。オックスフォードのエリート教育を土台にしたマリ（＝ジミー）に対して、自分のルーツは炭坑町と炭坑夫にあるとロレンスが考え、それを表現したという捉え方だ。炭坑夫は明らかにジミーに比べると好意的に描かれている。堂々とした彼の言動や、そこに見られる力強さは、軟弱で自信なさげなジミーと対照をなす。彼は重々しい足取りで突風のごとく作品に登場し、細身ながらもエネルギーの溢れる体格（“thin, but energetic in build”）と紹介される。それは、労働する肉体であり、より

動物的な本能を具えた肉体なのである。彼が仕事で汚れた身体を洗う様子は「炭坑夫の儀式の一部」(“part of the collier’s ritual” 359) と呼ばれ、神聖なものとして扱われる。炭坑夫は, “One wary, probably **hostile** man” (360 強調は山内), “with a stare something like the child’s, but **aggressive**” (360 強調は山内), “in his peculiar **harsh** voice, that had a certain **jeering** clang in it, and a certain **indomitableness**.” (360 強調は山内), “The other man’s **harsh fighting-voice**” (361 強調は山内) など、ジミーに対して攻撃的で、尊大である。そして、人の目が見られないジミーと違い、彼はジミーの目をまっすぐに見る (“he...looked straight and hard into Jimmy’s eyes....” 362)。このような堂々として男性的な彼の描写は、ロレンスが言うところの「生」を象徴する人物として描かれており、男性としてのジミーの軽薄さや弱さを際立たせる。そして、ピネガー夫人をフリーダと重ねるならば、夫の傍を離れても夫の影響力から逃れられないピネガー夫人は、マリと親しくなってもロレンス自身がフリーダの手綱を握っていると信じたい気持ちの表れだろう。また、オックスフォードのエリート教育を受けたマリの生き方よりも、炭坑夫の家庭で営まれる生活の中で培ってきた自分の生き方の方が、より「生」に率直で本質を伴うと言いたいのだろう。

同時に、ピネガー夫妻はロレンスの両親を思わせる。彼の父親は炭坑夫、母親は元教師で教養が高く文学好き、そして二人の関係はいつも悪かった。これは、ピネガー夫妻の設定とはほぼ同じである。そこで、ピネガー夫妻はロレンスの両親を描いているとも取れる。その場合、父を頑固で本能的だが賢く威厳のある人物として描き、母親の立場の弱さには同情しながらもジミーのような愚かな男についていく彼女の軽率さを批判している。幼い頃はひたすら母親に同情して父親を嫌ったロレンスだが、年齢が上がると共に母親の独占欲と支配欲の強さに不信感を強めて、父により理解を示すようになったと言われる。ロレンスの母親が実際に駆け落ちをしたわけではない。しかし、彼女は夫から解放されることを強く望んでいただろう。そして、幼いころから母親の味方となり、彼女



の愚痴を聞き続けたロレンスはそのことに気付いていただろう。そう考えると、ストーリーの中でのピネガー夫人の駆け落ちは、彼の母が望んだ「夫からの解放」を皮肉なかたちで実現させたと言える。このように、晩年のロレンスが描いたピネガー夫妻像からは、執筆当時の彼が両親の肯定的な面と否定的な面の両方を把握するようになっていたことがうかがえる。また、自分の配役でもあるピネガー氏を父親のイメージと重ねることで、彼が父親との和解の気持ちや共感を抱いていたとも理解できる。そして、父の文化の生命力を肯定し、マリに対して自分の生命力の優位性を示したのであろう。

## 7. 結 論

「ジミーと思い詰めた女」はマリとフリーダとの関係への疑惑や、雑誌投稿者である女性たちへのマリのアプローチなどをヒントに創作されたと言われる。確かにジミーの直接のモデルはマリであることが、ジミーの職種や外見、行動パターンなどから確認できる。しかし、同時にこの作品は『嵐が丘』の書き換えでないと思われる。なぜなら、人物描写や状況設定、ストーリーの構成など、多くの点で『嵐が丘』と共通点を持つからである。荒野を炭坑町に、ゴシック調の屋敷を炭坑夫の家に書き換えたこの短篇では、神話的な『嵐が丘』の世界が、ロレンスが親しんでいたより現実的な世界に設定されなおされている。ロックウッドのように軽薄な気取り屋で、気が小さく現実と直面できないジミーは、一見ロックウッドと違って恋愛を成功させたかのように見える。しかし実際には、ロックウッドと同じく真の意味で女性の心を掴むことが出来ない。そんなジミーの悪戦苦闘が喜劇的に描かれている。また、マリを編集者ジミーに仕立ててロックウッドの情けないイメージと重ね、それを炭坑夫の貧しくとも威厳ある生き方と対比させることで、ロレンスは自分のルーツとなる文化を肯定し、マリの文化を否定している。そう考えると、ピネガー夫人の名前がブロンテと同じエミリー（エミリア）であ

ることも、偶然でないのかもしれない。この作品にはエミリー・ブロンテの影が感じられる。

## 注

- 1) ロレンスとエミリー・ブロンテとの関係性を論じた拙論は以下の通りである。
  - (1) 「D. H. ロレンス研究：ジェシー・チェインバーズとブロンテ像」『広島女学院大学英語英米文学研究』第19号 Pp. 39-78 2011.
  - (2) 「『嵐が丘』をロレンス風に読む」『イギリス文学のランドマーク——大槻茂行教授喜寿記念論文集』大阪教育図書 Pp. 91-98 2011.
  - (3) 「『白孔雀』と『嵐が丘』の繋がり—「残虐性」を通して—」『ブロンテ・スタディーズ』第5巻 第1 Pp. 48-60 2009.
  - (4) 「D. H. ロレンスから見たキャサリン・リントンとエミリー・ブロンテ—『無意識の幻想』を中心に—」『英語・英米文学のフォームとエッセンス：佐野哲郎教授喜寿記念論文集』大阪教育図書 Pp. 245-253 2009.
  - (5) 「『ジョン・トーマスとレディ・ジェイン』の中に出てくるブロンテ姉妹の作品の意味について」『ザルツブルグの小枝：柳五郎教授傘寿記念論集』大阪教育図書 Pp. 645-655 2007.
  - (6) 「D. H. ロレンスの『母』序文に見られるエミリー・ブロンテと『嵐が丘』のイメージ」『広島女学院大学英語英米文学研究』第14号 Pp. 119-147 2006.
  - (7) 「D. H. ロレンス：“Blessed Are the Powerful”に見られるエミリー・ブロンテの「生」への評価」『広島女学院大学論集』第55号 Pp. 39-54 2005.
  - (8) 「『虹』と『嵐が丘』—Anton Skrebensky が『嵐が丘』に惹かれる理由の考察—」『エッジウッド・レビュー』第30号 Pp. 11-30 2004.
- 2) 「*Wuthering Heights* におけるロックウッドの語りとゴシック小説」『ブロンテ・スタディーズ』第3巻 第一号 Pp. 51-63 1997.

## 主要参考文献

- Brontë, Emily. *Wuthering Heights*. London: Penguin, 2003.
- Chambers, Jessie. *A Personal Record: D. H. Lawrence*. New York: Barnes & Noble, 1965.
- Finny, Brian. “Introduction” *Selected Short Stories*. By D. H. Lawrence.

- London: Penguin, 2000.
- Ford, George H. *Double Measure: A Study of the Novels and Stories of D. H. Lawrence*. New York: Holts, Rinehart and Winston, 1965.
- Gaskell, Elizabeth. *The Life of Charlotte Brontë*. 『シャーロット・ブロンテの生涯』 訳 和知誠之助. 京都：山口書店, 1980.
- Lawrence, D. H. “Jimmy and the Desperate Woman”. *D. H. Lawrence Selected Short Stories*. Brian Finney ed. London: Penguin, 2000.
- . *Lady Chatterley's Lover*. Cambridge: Cambridge UP, 2002.
- . *The White Peacock*. Oxford: Oxford UP, 2000.
- ロレンス, D. H. 『D. H. ロレンス短篇全集 4』 西村孝次, 鉄村春夫, 他, 監訳 大阪：大阪教育図書, 2005.
- 大平 章, 小田島恒志, 他, 編 『ロレンス文学鑑賞事典』 東京：彩流社, 2002.
- Ousby, Ian, ed. *The Wordsworth Companion to Literature in English*. Ware: Wordsworth, 1994.
- 『リーダーズ英和辞典』 第二版 東京：研究社, 2006.
- Siegel, Carol. *Lawrence among the Women*. Charlottesville: UP of Virginia, 1991.
- 戸田 仁 『D. H. ロレンスの思い出：ジョン・ミドルトン・マリイ評論集』 岡山：ふくろう出版, 1998.
- Williams, Raymond. *The English Novel: From Dickens to Lawrence*. London: Chatto & Windus, 1973.
- Worthen, John. *D. H. Lawrence: The Life of an Outsider*. London: Penguin, 2005.